

北海道医療大学学術リポジトリ

# カナダの看護学教育における大学院教育と研究体制 および助産活動に関する報告 : アルバータ大学と トロント大学の事例から

|        |   |
|--------|---|
| 著者名(日) | 齋藤 いずみ  |
| 雑誌名    | 北海道医療大学看護福祉学部紀要   |
| 巻      | 13  |
| ページ    | 65-69   |
| 発行年    | 2006  |
| URL    | <a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00006727/">http://id.nii.ac.jp/1145/00006727/</a> |

## <資料>

# カナダの看護学教育における大学院教育と研究体制および助産活動に関する報告 —アルバータ大学とトロント大学の事例から—

齋 藤 いずみ

キーワード：看護学 修士課程 博士課程 研究費 助産活動

## I はじめに

2005年7月から11月までの5ヶ月間、カナダのアルバータ大学、トロント大学で海外派遣研究員として研修の機会を与えていただいた。この二つの大学に滞在中経験したなかでも、特に看護学における大学院教育と研究体制、助産活動を中心に報告する。

## II 看護学教育における大学院課程と研究体制

### 1 アルバータ大学における事例

#### 1) 看護学部における博士課程と修士課程

看護学部の副学部長Marion N Allen教授と（新学部長を2005年9月から向かえる時期であった）、研究科長Judy Mill教授からアルバータ大学看護学部の教育の中でも主に大学院教育について話をうかがった。最も参考点は、博士課程の学生と修士課程の学生に課す違いを副学部長らとの話し合いで明確にできたことである。つまり研究者養成としての意味合いが強い博士課程の学生には、現在学業に専念し研究者として自立してやっていくことのできる能力取得を特に課していた。過去には在職のまま課程在籍を認めてきたが、博士論文完成まで非常に長期に及ぶなど、研究に集中することが難しかった。よって教育効果から考え、現在博士課程では、在職での勉学は認めてはいなかった。研究に専念できるように方針を変換したと明言したことは印象に残った。そのため奨学金制度も用意されており、海外から多くの留学生が来ていた。

一方修士課程の学生は在職者が多く、高度職業人養成という色合いが強かった。

カリキュラム構成としては、日本は特に博士課程であれば博士論文執筆が主であるのに対し、博士課程でも必修の課目も多いことが大きな違いであろう。これは概ね

欧米型大学院の特性のように思う。日本も、どの研究分野に進むとしても、大学院修了の条件として、単に専門分野の論文作成のみならず、研究の基盤となる科目の充実がより重要になると考える。

今後、北海道医療大学の教員や学生の中にも、海外の大学院での博士課程や博士号にチャレンジする希望者もあると思われるが、第一の関門はTOFELのスコアであろう。外国人であっても意思疎通に困らないことが要求される。

#### 2) 看護学部の研究費獲得

アルバータ大学の看護学部の研究を紹介するパンフレットの第一面は、〇〇教授は〇〇研究費をどのような研究プロジェクトで、いくら獲得できているかという内容のページから始まる。まず研究費獲得しているかしていないかが第一ページに来ていることに筆者は、ある種の驚きとともに日本も必ずそうなると感じた。予測どおり帰国後いくつかの看護系大学のホームページを閲覧すると、研究費獲得状況が公開されまさに事情はカナダと同じであった。

アルバータ州はカナダの中でも財政基盤の豊かな州であるため、オンタリオ州などから超有名学者や医師を引き抜き、潤沢な研究資金が供給され、アルバータ大学構内は、新しい建築群が林立していた。アルバータ州は財源を持つ州であるため比較的他の州よりは、研究費を獲得しやすい側面もあるだろうが、まずは研究費を獲得できる研究かどうかを、看護学部の研究紹介パンフレットの最初に置かれている事実は、おおいに筆者を刺激した。アルバータ大学の看護学部博士課程は北米では実績のある大学院のようである。このたび筆者をトロント大学で研修できるように御紹介下さったPhyllis Giovanettiアルバータ大学名誉教授は、前研究科長であり長く大学院で教鞭を取られていた。

#### 3) そのた

看護学部の建物は現在建築中であり、教員研究室は分散されていた。また看護系の実習室も特段日本の看護教

育現場にあるものと、変化はなかった。実習は主に圧倒的規模を誇るアルバータ大学病院で行われ、産科などは別の病院で実施されていた。特に隣接する小児病院は実績が高いようである。ヘリコプターでの搬送が一般的であった。

## 2 トロント大学における事例

トロントはカナダ第一の都市であるが、エドモントンでの生活の後に移動したため、システムの共通点や見慣れた系列店などもあり大きくは、生活に困らなかった。しかし銀行に行き、為替を組み、大家さんとアパートの契約を実施するなど新しい経験も多かった。

### 1) 看護学部における博士課程・修士課程・学部課程

トロント大学看護学部の学士コースの特徴は、多岐に富む学問分野の大学学部卒業者に開かれた、フルタイム2年間で看護学士を取得する課程である。また実習方法なども日本とは異なり、実習時間が朝7時30分から夜7時30分までと長時間であるが、週に3回ほどの実習時間であった。時間を学生たちは有効に活用し、研究所などでアルバイトをしていた。このアルバイトは研究の実際を肌で学ぶ貴重なチャンスである。印刷やアンケート用紙の郵便物処理などの作業が多いようである。

修士、博士課程の教育内容については、修士の学生とコンタクトはできなかったが筆者の所属した研究所には、研究者であり博士課程の学生であるものがいた。トロント大学では前述のアルバータ大学のように明確に在職を完全に禁止はしていないが、実質研究に専念する時間がなければ、学位取得は非常に困難であるように思われた。ここでもまた、アルバータ大学と状況は似ており、修士課程は高度専門職業人の色合いが強いのにに対し、博士課程の学生には徹底的に研究者としてのトレーニングがされていた。それゆえ、博士号取得者への教授らの賛辞は、非常に値あるものを感じた。筆者の体験した博士課程学生時代の暗くて長い道のりというイメージと重なった。

トロント大学新看護学部長が、10月にやってきた。カナダは英国、豪州、カナダという英国連邦という関連が強いことをあらためて感じた。豪州の大学からの研究者をトロント大学は多く迎えているようであり、過去に客員教授として招かれたSioban Nelson教授は、ヘッドハンティングされてきた人物である。新しい時代のトロント大学看護学部の運営を新しいメンバーに託したのであろう。

### 2) 看護学部の研究費獲得と研究所運営

トロント大学看護学部を代表する研究者かつもっとも大きな研究所Nursing Health Services Research Unitを主催している教授がLinda O'Brien-Pallas教授であり、筆者の

カナダ滞在中の格となる研修先であった。

Linda O'Brien-Pallas教授は、筆者が博士課程の学生時代、論文作成過程でおおいに影響を受けたPhyllis Giovanettiアルバータ大学名誉教授が紹介してくださった、カナダを代表する医療・看護における人的資源配置や看護人員配置などに関する教授であり、世界をまさに駆け巡っている旬の研究者である。医学部の教授も兼務している。

億単位の予算をカナダ政府、オンタリオ州政府から受けている大きな研究プロジェクトの主任研究者である。研究所の入り口には何の財源を何年から何年まで受けている研究所であるのかを、大きく掲示してある。日本であれば、論文の最後に何々研究費の援助を受けたなどと記述されることが多いが、ここカナダでは国際学会の導入にも何研究費の援助において実施したかが明確にされていた。それほどに、研究費を獲得できるか否かが重要なことであることをあらためて実感した。

トロント大学での研修の受け入れ責任者である、Linda O'Brien-Pallas教授が、筆者を客員教授として受け入れ、Nursing Health Services Research Unit研究所のメンバーに迎えて下さったことは非常に大きな喜びであり、感謝であった。研究所内に部屋と立派な机も用意されており感激した。

これまでの研究所の研究成果などの指導を教授から直接指導を受けた。主に看護人材の効果的配置、それによる成果の評価、また研究所の実際の運用など多くを学んだ。研究費獲得や大きな事業のためには、政府や看護協会とのコンタクトも重要であることを教授から学んだ。オンタリオ州看護協会の研究プロジェクトメンバーにも紹介して下さることになった。オンタリオ州の看護協会の力や、看護協会長の力、プロジェクト研究、臨床との意見交換の場を見るためにも、研究所以外にもこの会のメンバーとして学ぶチャンスを下さったことは大きな成果であった。

オンタリオ州の看護協会の研究プロジェクトメンバーに、筆者が博士論文作成過程でおおいに影響を受けたPhyllis Giovanettiアルバータ大学名誉教授がいらしたことは望外の喜びであった。

Linda O'Brien-Pallas教授は、二十名近い研究者を雇用し、様々な分野の研究を実施していた。特に統計学者を多く在籍させ、複数の研究を同時に何本も進行させていた。そのために欠かせないのが、プロジェクトチームであり、プロジェクトごとの進捗状況報告会議であった。研究の大きいアイディアはLinda O'Brien-Pallas教授がですが、実際の研究の進行のまとめ、研究所の実務経理管理面の運用は、Elizabeth Andrews氏が指揮していた。(教授の看護学部時代からの友人とのこと)他に秘書が存在

し教授の予定は全て管理していた。一方、時間は全て秘書に管理されている面もあるほど、コンピュータ上の空白時間に、どんどん予定が入っていく状態であった。教授と面談予約をとることが必須で、なかなか時間調整が難しい側面は世界共通であった。

Linda Obrien-Pallas 教授の研究の内容のみならず、研究所運営には、何人かの分野の専門家を置くこと、実際の研究を実施していく人材を抱えていること、彼らから出てくるデータを討論により自分のデータにまとめていくこと、管理運用面の実務責任者を置くこと、各分野からの博士論文の学生などを育てることを学んだ。

Phyllis Giovanetti アルバート大学名誉教授が、Nursing Health Services Research Unit 研究所までお越しくださり、直接講義を受け博士課程時代に引用した論文を直接本人から話を聞くことができ感激した。また、筆者の博士論文の引用文献に利用した1960年代70年代の米国の研究についても、Phyllis Giovanetti 教授が、自らの米国留学時代直接指導を受けた教授の論文も解説くださり、非常にわかりやすかった。夢のような時間であった。

研究所ではそれぞれの研究分野のスペシャリストから測定用紙の内容や、測定方法、分析方法などを学んだ。

### 3) 研究者とRegistered Nurses' Association of Ontario (オンタリオ州看護協会) の連携

オンタリオ州看護協会はトロントの都心部の高層ビルのなかにあり、看護協会長はまもなく博士号を取得する予定の50代の女性であった。今後日本でも看護協会長が、博士号取得者である時代が遠くないうちにやってくるだろう。



向って左から筆者、P. Giovanetti 名誉教授、L. Obrien トロント大学教授、一人おいてオンタリオ州看護協会長

看護協会での最も大きな成果はLinda Obrien-Pallas 教授が、主任研究者であるWorkload and Staffing Best Practice Guideline 作成の委員会メンバーにオブザーバーとし

て継続的に参加できたことである。看護協会は多くの看護分野のBest Practice Guidelineをこれまでに作成しており各分野での非常に実践に役に立つ「実践ガイドライン」である。筆者が参加したものは看護労働と人員配置の実践ガイドラインの作成である。

この会のメンバー構成員をみると、Linda Obrien-Pallas 教授の巧みなネットワークが良く理解できた。看護分野の研究者、看護協会メンバー、臨床のメンバー、他の学問分野を含む学際的メンバー、看護管理の名誉教授などであり、これまでの人脈や教授の若き日に学んだ先生や人々などがよく配置されていた。しかしまた単なるお礼人事でなく、皆実際に彼女を助ける知的援助者を多く有していた。研究者を支えていくにはこういうメンバーの人選も必要であると感じた。一方意見の食い違うメンバーとも辛抱強く語り合っており、おおいに参考になった。

看護労働分野では米国ペンシルバニアのLinda Aiken 教授のデータが有名であるが、カナダのすごいところは、カナダ版のデータでカナダの根拠を保証しようとするものであった。日本ではまだまだ日本独自ではなく、米国や他の国のデータを参考に語られることが多い。ここはさすがに科学的根拠に基づく研究のお膝元、マクマスター大学を要するカナダというべきか。

## Ⅲ 助産活動実践

筆者は助産師であるから、トロントで助産活動の現場に参加することを希望していた。今回の海外研修のテーマは必ずしも直接の助産行為ではないが、「周産期の看護の安全のための人員配置」は、大きなテーマであった。

筆者は1993年バンクーバーで開催された国際助産師学術会議に参加発表している。このときまでカナダでは、助産師教育は国内で実施されておらず、国外で免許を取得していた。

### 1 トロントイーストゼネラルホスピタル

トロントゼネラルイースト病院で、助産師の活動、入院時のトリアージの様子、問診、など説明を受けた。帝王切開手術を見学した。

またこの病棟師長から実際の看護婦の勤務表作成と、勤務体制について講義を受けたことは、研究所と異なる学びであった。筆者は安全のためにスタンバイ要員の確保が必要と考えていたが実際の病棟では、看護師長が人材不足と判断したら、登録リストから電話で呼び出す方式であった。最も驚いたのはスタンバイ要員とは、他の病院で現在働いている助産師だったのである。家庭の主

婦やアルバイトだと思っていたが、現役の他病院の看護職が登録するということであった。実際はすぐに使い物になる現役スタッフでなければ、業務が実施できないのかもしれない。

## 2 助産師クリニックと産後の自宅訪問指導

助産師は病院内というよりは多くの場合、地域のクリニックで働き、分娩時病院に産婦と一緒に来院し、分娩室など病院施設を使い自分が診察に病院に行くというシステムである。いわば開業医がオープンシステムの病院を使う場合と似ている。

クリニックでは診察と保健指導にじっくり時間をかけ取り組んでいた。カナダでは、新生児の聴力審査は必須であり助産師が産後の検診時に、母と乳児を診察していた。

数件、産褥期の母児の訪問に同行した。母乳は学歴が高く経済的に恵まれているケースのほうが、継続率は高いようである。新生児への聴力検査が北海道では完全実施されていない他には、特に異なる項目はなかった。

## 3 その他

世界中の小児科医、看護師のあこがれる病院トロント小児病院で全館詳細に見学する機会に恵まれた。トロント大学小児外科名誉教授Barry Shendrin先生とオペラコンサートの隣の席というご縁で知り合い、案内をいただいた。世界的にも有名な結合双生児分離手術をカナダで初めて成功させた小児外科医である。小児病院は予後不良な子供と家族が楽しく過ごせるような工夫が随所に見

られ、世界中から見学者が多い。また、副院長・看護部長と学会を通じて知り合いになることができ、将来共同研究や大学生などの研修の可能性について話しあった。

## IV おわりに

阿保学部長はじめ、大学関係者の皆様のおかげで研修の機会をもてたことに、心から感謝申し上げます。多くの皆様のご協力に支えられ無事研修が終わりました。

英語の効果的な履歴書を書くことさえわからなかった私に、御指導くださったNishisato教授、Nishisato教授を御紹介下さった岩本隆茂教授に心から感謝申し上げます。またトロント生活のアドバイスを下さった岡本先生、岡本先生を御紹介下さった細川真澄教授に感謝申し上げます。海外に住む経験、語学の苦勞、海外の研究事情、看護学教育すべてにおいて素晴らしい刺激を得ました。研修期間は途中大学院講義実施のため一時帰国し、アルバータ大学には7月1日から8月18日トロント大学には9月1日から11月30日まで滞在いたしました。

## 引用参考文献

- 1 Linda Obrien-Pallas : Developing and Sustain Health Working Environments : Staffing and Workload Practices Draft 3 , RNAO Nursing Best Practice Guidelines, 2005
- 2 Linda Obrien-Pallas : Evidence-Based Standards for Measuring Nurse Staffing & Performance, Nursing Health Services Research Unit, 2004

System of Post Graduate Education and Research for Nursing and Midwifery in Canada  
—Case Reports from University of Alberta and University of Toronto—

Izumi SAITO